

淳と淳平

あした
明日からゴールデンウィークが始まる。单身赴任で東京に住んで
いる父さんが、久しぶりに休みをもらって帰って来るので、淳は朝
から浮かれている。一緒に釣りに行こうと思つて、釣竿やリールの
点検をして父さんの帰りを待った。だけど、予定していた時刻になつ
ても父さんは帰ってこない。夜、父さんの（ただいま）の代わりに
でんわ
電話が鳴った。受話器を取ると、
「仕事の都合で帰れなくなった」
父さんの声だ。淳は、

「父さんなんかキライだ！もう、帰ってこなくていいよ！」
受話器に向かって叫んでしまった。受話器の向こうから父さんの、
「すまない……」

小さな声が返ってきた。母さんは、

「お仕事なんだから仕方ないでしょう」と言うけど、楽しみにしていた分、がっかりも大きい。淳はふてくされてベッドの中にもぐりこんでそのまま寝てしまった。

次の日、淳は、リュックに着替えと、お気に入りマンガ本をつめこんでバスに飛び乗った。行き先は、隣町にあるおじいちゃんの家。おじいちゃんの家は、百年前からある古い家で、庭が広く、木

がたくさん植えてあるので、淳は（ちよつとしたキャンピング気分が味
わえそうだ。よし、ゴールデンウィークの間、キャンプをして気ま
まに過ごそう！）と思いついたのだ。

バスを降りて、おじいちゃんの家に向かって商店街の中を歩いて
いると、顔見知りのおじさんがいせiyok声をかけてきた。

「よお！淳。おじいちゃんちのマルがその公園であばれとつた
ぞ」

近くの公園を指さした。

マルは、おじいちゃんちにいるシバ犬のことだ。まだ一歳位なの
で思い切り遊びたい時や、散歩が足りない時は、逃げ出してさんざん

遊びほうけて帰って来る。でも、一度だって人にほえたり、あばれるなんてことはなかった。（おかしいな？）公園に入ると、ワンワン、聞きおぼえのある声が聞こえてきた。マルの声といっしょに、

「だれか、たすけてーっ！」

助けを呼ぶ声まで聞こえる。（たいへんだ）声のする方へ淳が走って行くと、マルがジャングルジムに向かつてはげしくほえたてている。ジャングルジムの上には、大きなリュックを背負い、変な形の帽子をかぶったクマ、いやひげもじやの若い男が、半ベソをかきながらさげんでいる。

「マル！」淳が呼ぶと、マルはほえるのを止めて、シツポをふりな

がら淳じゅんのところはしに走きって来た。淳じゅんは、ジャングルジムの上うえに向むかっ
て、

「すみませーん。けがはありませんか？」。

声こえをかけた。淳じゅんの顔かおを見みた男おとこは、

「カズちゃん！」と叫さけび、ジャングルジムの上うえから飛とび降おりた。驚おどろ
いたマルが歯はをむいた。男おとこは、後あとずさりしながら、

「ごめんよ。驚おどろかせるつもりはないんだ。ねえ、君きみの名前なまえは平良和たいらかず
男おといわないかい？」

「ブブーツ、残念ざんねんでした。ボクの名前なまえは花城淳はなしるじゅんでーす。人ひとちがいみ
たいだから行いってもいいでしょう」

淳じゅんがバイバイしようとするのと、突然とつぜん男おとこは、おいおい泣なき出だした。
山やまのようにでつかい図ずう体たいをしているくせに人目ひとめもはばかりちいに小こさな
子こ供どもみたいなに泣なくので、淳じゅんは面食めんくらってわしまった。

「大人おとなのくせに、カツコ悪わるいぞ」

公園こうえんを散歩さんぽしているオバサンや、ジョギング中ちゆうのオジサンが変へんな
顔かおをしてこすつちを見みている。淳じゅんは男おとこのてをひつつて、近ちかくのベン
にすわらせる。ひやつとしてつめたいてだ。

「おじさんの名前なまえはなんていうの？ どうしてきゆうに泣ないたりしたの？」
男おとこに聞きいてみた。男おとこは、はなをすすりながら、

「わたしの名前なまえは平良淳平たいらじゅんぺいと言って、ずつとむすこ子こをさがしているんです」

ポツから、一いちまいの古ふるびたしやしんを取とり出だして淳じゆんに見みせた。

「へえ、おじさんの名なまえ前まへもボクとおなじ淳じゆんなんだ。この子こがカズちやん？」

かみがたがちがうことをのぞけば、一いちーンじゆん淳じゆんと言いってもいいくらい、よくにていしやしんる。のなか中で、まるがりあたまのわんくおとこそおうな男おとこの子こは木きにのぼつてとくいそうわらにつていかおる。その顔かおは、はじどうもめて見みる顔かおとは思おもえない。のうらには「和男かずおななさい歳か」とかかれていた。

「君きみを見みた時とき、てつきりむすこ子おもだと思おもって声こえをかけたんだ。人ひといだと分わかったとたかなん。しなくなつて……」

めなめそめそ泣ないでいじゆんべいる淳じゆん平へいを見みていじゆん淳じゆんはすこしイライラしてきた。

「おじさんは、ずっと子供をこども してるって言いってたけどそれって、ずっと子供をこども ほったらかしにしてたってこと？ どうして子供をこども ほったらかしにしてたの？ 子供のこども ことがかわいくなかったの？ のくせに子供こども のいぼしよ が分わからないなんておかしいよ。」

しゃしん
をなでながら淳平は、じゅんぺい

「カズちゃんわかとれるのはいやだったけど、くをまもるため仕方しかたがなかつたんだ。あの時とき、くをまもることは男おとこたちの大事だいじな仕事しごとだったんだ。やっかえと帰かえって来きたと思おもったら、こきようのけしきはすっかり変かわってしまつて、みぎもひだりも分わからない。おまけにあはなちここつちで犬いぬにはおっかけられるし……」はなをすすつた。

なが あいだ　い間、お仕事だから仕方ないでしょう　のひとことで父さんに

あ　いたい気　ちをガマンしてきた淳は、淳平がめそめそしている

すがた　み　を見て、父さんのさみしそうな声を思い出した。（そうか、さみし

いのはボクだけじゃなかったんだ。　おな　じように父さんだって……。

カズちゃんも、ずっとお父さんと　はな　ればなれでさみしいだろうな。

まいご　子になってしまった淳平もなんだかかわいそうだな）と、　かんが　えて

いるうちにたまらなくなってきた。

「よし、　いま　からカズちゃんを　さが　そう」

じゅんぺい　淳平の　を　っ　ってずんずん歩き出した。マルがあわてて後を

ついて来る。

「ねえ、どこに行くの？」

町はずれの^{まち}の上^{おか}にある城^{うえ}を指^{しろあと}さして淳^{ゆび}は、

「^{たか}い^{ところ}からだと^{さが}し^{もの}が見^みつかりやすいつて、おじいちゃんが言^い

つてた。あそこに^{のぼ}れば、カズちゃんの家^{いえ}が分^わかるかもしれ^いない」

ふうふう^{いき}をき^{いき}らして淳^{じゆん}と淳平^{じゆんぺい}は城^{しろあと}のある^{おか}を^{のぼ}る。城^{じようへき}の

上^{うえ}から町^{まち}を見^みる^おすと、^{すず}しい^{かぜ}が^{ふたり}人のほほをな^{ほそ}でていく。

淳平^{じゆんぺい}は、目^めをさら^{ほそ}のように^め、

「ずいぶん家^{いえ}がふ^{なんぼう}えたなあ。ボクが^い方^{とき}に行く時^{あたり}、この^はみんな

キ^{ぼたけ}だった^まのに……。これ^{まいご}じゃ子^こになるわけだ」

ため^{いき}をつき^{いえいえ}ながら家^みを見^みつめて^いる。

「カズちゃんの家には、か目になるようなものはないの？」

「そうだなあ、ボクの家は古くからある大きな家で、庭にはたくさん木が植えてあって、はイジュの花がいてるはずだ……」

淳の目に一の古い家がとびこんできた。庭にはたくさん木、その中の一本に目をやると、花がいてる。

「イジュの花だ。カズちゃんの家かもしれないよ。行ってみよう」

淳は、淳平のうでをつつて一にをかけ降り、イジュの花がいてる家を目指して走った。マルがほえながらその家のから中にえた。

「おお、マル。おかえり」聞きおぼえのある声がする。(あれ、ここ

は？) かってぐち から見たことみがなかったので気がきつかなかったがそこは、
淳じゅんのおじいちゃんの家いえだった。いきをきらしてたっている淳じゅんのすがたに
気がきついたおじいちゃんが

「よう！淳じゅん。日きようはおもしろいところから来きたな。」

家いえの中なかから顔かおを出だしててまね きした。

「ねえ、おじいちゃん。ボク、人ひとのさがしてっだ いをしているんだけ
ど……」

「だれかといっしよなのか？」

「うん。平良淳平たいらじゅんぺいっていうおじさん。子こ供どもをさがしてるって。ほら、
おじさんも、なんとかい言いったらどうなの？」

淳は、後ろに つてもじもじしている淳平を前に し出した。
淳平の顔を見たおじいちゃんの顔が、こわばったかと思うと に泣
きそうな顔に変わった。

「お父さん！」

「えっ！」

淳と淳平は顔を見合わせた。の中の男の子がおじいちゃんだ
つたなんて、 じられない。おじいちゃんは、はだしのまま庭に飛び
出し、イジュの木に飛びついたかと思うとスルスル り始めた。木の
てっぺんまでくると、

「お父さんが出 して、 年 上たちました。お父さんが出 す

る朝ボクは、ここからいつまでもお父さんを見つけたよね。お父さんは、度も度も後ろをり返っていたね。お父さん、お帰りなさい。ずっと待っていたんだよ」

木の上から話しかける。その間は、いなくカズちゃんだった。淳平は、イジュの木の間に、うれしそうに木を見上げている。「やつと帰れた。カズちゃん、ただいま」

淳平のまわりにイジュの花びらが、のようにひらひら降りてきた。ここにいて、淳平のはだんだんくなってきた。しまいには見えなくなった。

淳平とおじいちゃんのうれしそうな顔を見ていた淳は、

父^{とう}さんの声^{こゑ}が聞^ききたくなくな^なった。そして
（大^{だい}きだよ）^すって言^いいたくなくな^なった。

（山 広子）

ジャガイモの大変身だいへんしん

わたし だいこうぶつ の大 は コッ ツ 。 はじ めてコッ ツ くりをした日 ひ から、と
つても す きになつたんだ。

その日 ひ、 わたし はいつものように がっこう から帰 かえ ってきた。

「ただいまー」

げんかん のド いきお を あ いやく おも けると、ジャガイ にお の い がした。そう
か、コッ ツ をつくるんだった、と思 おも い出した。

「お帰りー」
かえ

お父 とう さんの声 こえ が だいどころ から聞 き こえてくる。

「カ、くをって、ってくれ」

声だけがにく。

日のごは、お父さんが。朝から「ごは、コッ

するからお前らもうんだぞ」と言われたのだった。はすぐに、

おちゃんと顔を見合わせてんだのに、そのことをすっかり
ていた。

「さあ、ジャガイをゆでておいたから、カはつぶすのをやって
くれ」

お父さんが、ジャガイの入ったボールを
し出した。それを受け
とって、マッシャーでつぶし始めたら、お父さんが言った。

「ちがう、ちがう、こうやってやるんだよ。カ、見ていてごらん」

をかしながら、わたしにお本を見せた。なんだかイライラしてきて、「うるさい」って言ってしまった。だって、ンうるさいんだもん。

あー、わかったよ。これなんだ、マリちゃんが言っていたこと。

もやっり「りん」なんだよな。の帰りにのマリち

ゃんが話していたんだ。

「マリはね、家の中で一のりんなんだって。ちよつとしたことでもすぐるって、お母さんに言われたの」

ふまん
そんな顔かおをしていたマリちゃん。もマリちゃんとおな
じだよ。
がっこう
では、ふつう
にしているのに、家いえではよくイライラしちゃうんだ
よな。どうしてだろう。

そういえば、日きのうも……。

きょう
日は休みやすの日ひで、家かぞくでじいじいの
はたけ
に行いってジャガイほを
つてきた。いま
つぶしているのは、そのときのジャガイほだ。たくさん
るぞ、と気合きあいを入れて、ほ
つていたら、じいじいがそばに、よ
つてきて
わら
った。

「ちがう、ちがう、こうやって、ほ
るんだよ」
そのときにも、つい「うるさい」って、言いってしまった。

家 かぞく い が い の人 ひと に言 い ったのは は じ めてだ め ったから、す す ご く 後 こう か い している。
じいじいは、おどろいて、 な に い か言 い っていたの の だ け れ ど 知 ら ん り した。
いちいちうるさいんだよ、じいじいもお父 とう さんも。

「なんかイ なことでもあつたのか？」

お父 とう さんが わ た し の顔 かお をのぞ ぞ き んだ。う う つ と う し く て 「 に 」と だ け え た 。

「それなら、いいんだけど」

わ た し はう う つ む い て、ジヤガイ を つ ぶ し な が ら か ん が え た 。「ち ち が う」
とか「 こ う な ん だ 」と、言 い われる の が イ な ん だ よ な 。

「キ は、おそいなあ」

時とけいを見上げたお父とうさんが、エンジンかのかわをむきながらつぶやいた。

「おにいちゃんろっこうじは、時ろっこうじだから、もうすぐ帰かえって来くると思おもうよ」

年にねんせいのわたしは、時ごっこうじなので、年ごねんせいのおにいちゃんいえより家いえに帰かえるの

がはやい。お父とうさんは、「そそつか」とそ気けなく言いって、度こんどはたまねぎ

を取とり出だした。

「ふー、なんぎー」

だんだんうでがだるうでくなってきたので、を休やすめて一ひといきつひといきいた。

はつきり言いって、コくツくりがこんなたいへんに大たいへん変おもだとは思おもわなかつた。

コいえツかんたんが家いえで、単かんたんにつくれるよろこんだって、よろこんでてっだつてしまてっだったけ

れど、めんどうくさよろこくなつてきた。

ちから　い　さぎよう　の　る　は、お　ちゃんに任せ　まか　きなんだよ、まったく。
こころ　なか　もんく　い　の中で　を言ったら「ただいまー」と　イ　ングよくお　ちゃ
んが帰って　かえ　きた。

ところが、お　ちゃんには　の　があてがわれた。

「おう、ちようどよかった。　キ、クツキングカツ　ーを　し
て」

お父さんの声に、お　ちゃんが「はいよ」と　える。

お　ちゃんと　を　代したい、と　したけれど、クツキング
カツ　ーを　うのは　なくて、　にはまだ　いんだって、　じゃ
ないよ　ン。

代りに、エンジンのやねぎのくずをゴの器に入れるよ
うまれた。すると、「ゴ」にしたおちゃんが、もうこれ
で度目になるだろうか、「カンキョウ」のことをげに話し出
した。

「おい、カくん、君はなんでゴをめているのかわかるか
ね？」

お父さんが、こまめにゴをめてに一度、にって行く
のは知っている。

ゴはもえるゴに出すより、に返した方がいいんだって。
のになるしね。

「知^しってるもん」

わ^{わたし}たし つ^{つよ}よ
は が^がって え^{こた}た。

「うそつけ」

お^{にい}ちゃん^が、クツキングカツ ーに ン^ンジンを^つめ^こみながら、
わ^{わたし}たし め^めみ
の^の目^めを見る。

「^{かんきよう}を^{まも}る^{はたけ}ために^うに^うめる^うんだぞ」

だ^{なん}から^{なん}なの？ と^い言^いいた^いく^いなる^いよ^いう^いな^い言^いい^いぐ^いさ、
う^うる^うさ^うい^う、^{こえ}声^だは^{くち}出^{うご}さ^{うご}ず^{うご}に^{うご} だ^{うご}け^{うご} か^{うご}した。
は^はら^らた

「あー、^{おこ}つ^{おこ}た、^{おこ}つ^{おこ}た」

「もう、お^{にい}ちゃん^のバ^バカ」

言いってしまこってから、「おこりんぼう」のもじが、あたまの中なかでまわぐるぐる
つまわっていた。

「わきかつたぞ、カ」

きゆうにお父とうさんが、りようてをあ合あわあせておとンとたをたてた。

「あとしうえのひとさ、年上おしの人ひとつてみんな えおしたがりおしなんだよな、カ もおもそう
思おもうおもだろう？」

「うおん、うおん、うおん」

わたしは、おお大さんどきおくお度もおうおなおずおいた。

「年とししたのおカは、いおつも えおられておばかりおだよおね。イおになるおはず
だおよ。だおつて えおてほしいおいおと言いわいなくいてもまわりかがかっておにおえるおん

だから。お父とうさんもその気きも ちわかるよ」

れておおいちゃんも「わかる、わかる」と をくびにたてつた。

わたしは、おし えたがりのせいで っおこっていたのか。「でもね」と、お父とうさんは前まえきして けた。

「カ に知しっていて ほ しい、できるようになって ほ しいと思おもって えているんだよ。それはね、みんなお前まえのことが す きだからなんだ」

「えー、おおいちゃんも？」

「そうだよ。な、キ」

おおいちゃんは て れくさそうに目めをそらし、クツキングカツ ーのス イツ を入いれた。

ガー、ガー、ガー

大きなで、おちゃんの声は聞けなかったけれど、久しぶりにがジーンとあつ くなった。

「キ、つぎはあぶら でいた めてくれ」
良くお父さんが指しじ を出す。

おちゃんにいが、エンジンたまとねぎのみじん切りぎを、ひきにくと一緒にいっしょに
ラインいたでめる。

わたしは、まだつぶすだけ……。

「そろそろ、いいんじゃない？ さ、ジャガイがコッへんしん に変身するぞ」

そう言いって、お父とうさんが顔えがおでふり向むいた。つぶしたジャガイいに
めたものを入いれ、しお、コシヨウをくわえてまぜ合あわせた。あとはコ
ツかたちの形まるにかたちめていく。ーやかたちイ、いろいろな形かたちにしてみたら、
ねんどあそねんどあそ遊あそびみたいでへんヨー楽たのしい。おにいちゃんもサカいとかいとか言い
って変へんなものをつくつくっていた。

いよいよ、さいしゅうだんかい。いろんかたちな形かたちにしたものこむぎこに小こむぎこをまぶし、
ときたまにひたして、こンこをあぶらからめたらあであげる。つぎつぎとコ
ツいろがいろできあがる。キいろのクいろクいろしたコいろツいろになつた。
つくりながら、なんかいも「ちがう、ちがう」「こうするんだ」ついて言い
われたけれど、もうおこることはなかつた。

家かぞく そろつての食ゆうしょく。お母さんかあも、ちようど帰かえってきた。

「すごい。おてつだいできたんだね。コッツ おいしそー」

お母さんかあに言いわれて、はうれしくなわたしった。

「どーっても、おいしいよー」

コッツ をほおぼ ったまましや ったら、お母さんかあが言いった。

「カ、おはしのち方かた、ちがう…」

言いい わらおないうちに は切きり出だした。

「お母さんかあも、やつりおし えたがりだね」

みんなだいばくしょうで大なか する中なか、お母さんかあだけがキョンとしていた。

お父とうさんに 明せつめいしてもらって、お母かあさんは したみたい。「ふん」と 鳴ならしてから 向むき っなた。

「お母かあさんも カ のこと きだよ。だから、これからも えたがり は変かわらないかもね」

は、 ツてと れわいした。

ふと見みわたすと、家かぞく のことが、コ ツ のように思おもえてきた。ただゴ ゴ していたジャガイ たちが、大だいへんしん変身した。ク クとあつたかいコ ツ に。この時ときにコ ツ がとつても きになつたんだ。そして、もちろん家かぞく のことも。

次つぎの日ひ、わたしはマリちゃんに話はなしてあげた。おこりんぼうは、おしえたがりのせいだつてこと。それからね、おしえたがりは、マリちゃんがすきだからで、えーつと……。そしたら、みんながジャガイからコッ
に大だい変身へんしんするよつて。でも、マリちゃんはよくわからなかつたみたい。だから言いつたんだ。「マリちゃんも家かぞくで、コッつくつてみたら」つて。

()

なんでなんでのおまじない

すいようび

日。はるちゃんは気ききました。おねえちゃんの上うへには

ほんもの

本ほんものの時とけいがあるのに、はるちゃんの上うへにはおもちゃの時とけいし

かありません。分じぶんでうごかさないとうごかない、なんだかさえない時とけい

です。はるちゃんだってもう年さんねんせい。本ほんものの時とけいがほしいのです。は

るちゃんはお母かあさんに言いいました。

「なんで、はるちゃんには本ほんものの時とけいをかつてくれないの？」

お母かあさんは、

「なんでって、あなたはまだ小ちいさいでしょ」

いっと向むこうの　へや　に行いつちやいました。

木　日もくようび。お　だちのお家うちに遊あそびに行いったら、とつても面おもしろ
い　ーム
がありました。いいな　。　も　しいな。ウ　に帰かえるとちようどお
父とうさんがいました。はるちゃんはさっそく、たのんでみようと思おもいま
した。

「なんで、はるちゃんのお家うちは　ーム　つてくれないの？」

お父とうさんは、ふきげんそうに言いいました。

「人ひとの家うちとはるちゃんの家うちは、　うでしよ」

日きんようび。お母かあさんがお　ちゃんのを　つていました。ラツ
キー。はるちゃんのお母かあさんは「分じぶんのことは　分じぶんで」つて、めった

に しゅくだい の てっだ いはしてくれませんか。でも、日 きょう は てっだ ってもらえるかも。はるちゃんは うれ しくなりました。そして言 い ったんです。

「なんで、はるちゃんのは てっだ ってくれないの？」

「あなたの しゅくだい は じぶん 分でできるものでしょ」

お母 かあ さんから思 おも いがけず大 おお きな声 こえ で言 い われて、はるちゃんはびっくり。 なみだ が で 出てきました。

気 き が つ きましたか？はるちゃんの くち ぐせは、「なんで」です。 なに か言 い いたいことがあるとき「なんで」って始 はじ めるのがくせなのです。

日 どようび になりました。日 きょう はお ねえ ちゃんと ふたり 人、おばあちゃんの家 いえ で過 す ぎして、夜 よる もお とま りすることになっています。おばあちゃんの家 いえ

にはるちゃんたちをあずけて、お母さんとお父さんかあが出でかけていくと、はるちゃんはさっそく言いいました。

「なんで、はるちゃんのお母さんとお父さんかあはお出でかけばっかりするの？」

そのとき、おばあちゃんの目めが、ギリとひかりました。はるちゃん
はドキっとしました。でも、すぐにもとのやさしい目めになって、

「はるちゃんは、さびしいのかな」

と、きこに聞いてきました。

「に。」

ほんとうはおばあちゃんの言いうとおり、こしかつたのです。

おひるごはんの時間じかんになりました。はるちゃんとおねえちゃんとおばあちゃん、さん人でおこのみやきをつくります。にんじん、キヤベ、たまねぎ……どのやさいもおねえちゃんはんぶんと半分ずつ切きります。ほうちょうちようにちよう、まにまいない。おねえちゃんとはるちゃんが、けんかじゅんしないようにしてあきようるのです。ところたまごが、をい入いれるとききになつて、日たまごはさんがこしさんかないこときにつ気がきまました。ジャンかンかにかつた人ひとがふたつ、負まけた人ひとがひと一つわつてボールいに入いれます。さいしよ「はグー、ジヤンン、ポン」

残念ざんねん。はるちゃんまの負まけでした。はるちゃんいはくやくいなくなつて言いました。

「なんで、おねえちゃんばかりかつの？」

すると、おばあちゃんの目めがギリ、はなのあながくくとういきました。
た。はるちゃんはびっくり。でも、またまたすぐに、おばあちゃんは、
もとのやさしい目めとふつうのはなになって、

「はるちゃん、くやしいの？」

って、聞きいてきました。はるちゃんは思おもわず

「くやしくなんかないよ」

はるちゃんは、なんだか、きゆうにおこのみやきくりがつまらなくなっ
て、ソねころにねころと寝ねびました。

「…はるちゃん、はるちゃん」

おばあちゃんの声こえがします。いつの間まにねむったのでしょうか。もう時にじです。

「はるちゃん、おこのみやき食たたら？」

「おばあちゃんたちは？」

「先まきにいただいたよ。はるちゃん、よく寝ねてたから。」

はるちゃんは、かかなしくなって言いいました。

「なんで、おおこしてくれなかったの？」

度こんどは、おばあちゃんは目めをギはなリ、のあなをクク、ほっぺたをプツあかとくおおくして、大こえきな声を出だしました。

「はるちゃん！なんで、なんでってしよっちゅう言いうの？」

はるちゃんはドッキリ。ところが、すぐにおばあちゃんは、「あ、しまった。なんでって言っちゃった」とつぶやき、はるちゃんがこれまで見たことがないような、子どもみたいな顔になりました。そして、「おまじないがとけちゃったのかな」

そうつぶやくと、りんでしまいました。はるちゃんは、おばあちゃんがしんいになつて、小さい声で言いました。

「なんで、だまっているの？」

「ふー」

おばあちゃんはながいためにいきをつくると、くちをひらきました。

「いまおばあちゃんのこと、しんいしてくれました？」

度は、はるちゃんは すなお にうなずきました。

「だったら、おばあちゃん だいじょうぶ ？とか、どうしたの？って聞いたらいいんだよ。なんで？って言うんじゃないよ。」

と、ゆっくり話 はな しはじめました。

「おばあちゃんもね、こどもの ころ 、 いま のはるちゃんみたいに、しよつちゆう い なんて？ い なんて？ い って言 い ってたんだよ。」

そうなんです。おばあちゃんは、はるちゃんにそっくりだったんです。だから、はるちゃんの気 き ちがよくわかるんですね。ほんとうは「なんで？」じゃなくて、ほかに言 い いたいことがあるんだってことが、おばあちゃんには と に取る と ようにわかるんです。

「さっきだって、^{なん}で^おこしてくれなかったの？って言うんじやなくて、^っの^っことが言^いいたか^ったんでしょ。」

「^っの^っことって？」

はるちゃんは^くび^をか^しげ^ました。

「^おこ^して^ほし^かつ^たの^は、^どう^して？」

「^ひと^りで^食た^って^つま^らな^いし」

「^さん^にん^いっ^しよ^で一^緒に^食た^っか^つた^んだ^ね」

おばあちゃんも^くび^をに^ふり、

「^さん^にん^いっ^しよ^で一^緒に^食た^っか^つた^なって、^しょう^じぎ^に言^って

みて^ごらん。ほ^ら」

しかたなくはるちゃんはつぶやくように言いました。なんだか^てれ^{くさ}いのです。

「^{すなお}になるってとても大事^{だいじ}だよ。はるちゃんは、なんで^いって言^いつて^{しか}られたり、ソンをしていることがたくさんあるでしょう。」

はるちゃんは、^{すいようび}日^{きよう}から^{おも}日^だまでのことを思い出しました。ほんとうにいやなこと^つきです。これって「なんで？」のせいだったのかな、はるちゃんは^{かんが}えました。

「おばあちゃんも子^こどものころ、ソنبっかりしていたからさ、わかるんだよ。おばあちゃんね、おばあちゃんのおばあちゃんにおまじないをかけてもらって、なんで^いって言^いわ^いないようになったんだよ。

でも、あんまりはるちゃんが　なんで、なんで　って言うから、おまじないがとけちやっただみたい。あしたの朝、一緒におまじないかけようね。」

おばあちゃんは、いたずらっこのような目をして、楽しそうに言いました。

日にちようびの朝あさ。はるちゃんが　そうしんいにしているのに、おばあちゃんじしんは　まんまんです。

「大だいじようぶ、おばあちゃんに任まかせなさい」
「ほんとう？大だいじようぶ？」

おばあちゃんは、はるちゃんを　上おくじように　連れていきました。

「ンデカンデ　ンデカンデ　オマジ　イ、ク　ク　ス　オ　デキル
ンルン」

なんだか、わらいたくなるような言ことばですが、おばあちゃんはしんけんです。
りようてを朝日あさひに向けて目をつぶってさんかいとなえました。そしてその
をはるちゃんのあたまにほわっ、ほわっ、ほわっさんかいと　かざしました。
おばあちゃんのては、はるちゃんのあたまにくつついていないのに、も
わもわもわつと　思ふしぎな　じがしました。ほんとうにおまじないがき
いたかもしれません。

そのあと、おばあちゃんは　分じぶんで　分じぶんにおまじないをかけて、ふたり人
のおまじないが　せいこうするようにな　れんしゅうをしました。「なんで」と言いわな

いための れんしゅう です。はるちゃんは れんしゅう つきのおまじないがあるなんて ふしぎ 思 ふ でしたが、がんばりました。

げつようび 日も かようび 日も、はるちゃんは れんしゅう を つ けました。 すいようび 日にな

って、ついに れんしゅう したことをやってみることにしました。 しょうじき に な な はな なお に話 はな すのです。

「おかあさん、なん……、えっと、 わたし もほんもの時 とけい がほしいな
」

はるちゃんの むね はドキドキ たかな 鳴りました。すると、お母 かあ さんは、
「そろそろはるちゃんにも ひつよう かな」

と、先 ちが とはぜんぜん い う言 かた い方をしました。

木 日はお父さんに言ってみました。

「お のウ にある ームがおもしろいんだよ。うらやましくなっちゃった。」

すると、

「そうだね、 だちの ってるものって しくなるよね。お父さんも
そういう あるな」 って。お父さんといろんなことを、おしゃ
りしました。 ームは ってもらえそうにないけど、はるちゃんは

先 よりもずっといい気 ちでした。

日、はるちゃんはおばあちゃんに電話をかけました。

「おばあちゃん、あのおまじない、なんでこんなに くだらうね」

「なんでかね」

ふたり
おおわら

人は大いしました。ふたり人して「なんで」って言っちゃっている

んですから。でもね、この「なんで？」は、ほんとに「なんで？」っ

て思っている。おも
すなおな「なんで？」だからいいんですよ。

(子)